

特集 放課後の子どもたちの生活

勝敗主義の「部活」からみんなで築く「部活」へ

―バドミントンの顧問の生活の中から―

はじめに

編集部から「高校生の放課後の生活」についての執筆を依頼された時、私が具体的にかかわっているのはクラブ活動、それもスポーツ（バドミントン）の場面だけで、とても全面的な分析のできる立場にないことを申し上げました。それにもかかわらず、お引き上げしたのは、このいわゆる「部活」にたくさんの方々があつたさうおられるのに、その実践がきちんと整理されその問題点が提起され論議されたことがなかったのではないか、という思いがあつたからです。「部活」の弊害を「あの人も部活にはまっていますか」「あそこには逃げこんだのか。」という局外からのやや冷たい批判や逆に過熱したその状況の中にとりこまれた自嘲の声やそ

本 田 敏 彦



こではいえないいきどおりを感情的に告発する声に終らせているのをきくとき、私がかつて教師―機械的労働者論側に立つ人たちから「クラブ活動は本務ではない。社会体育を担う人たちにゆだねるべきだ。」「無定形無定量の労働をして、勤務時間を守るたたかきに水をさすのか。教師聖職者論に立つ人々は職場の団結をみだす。」等々いわれた時と同質の教育観の影響の大きさを感じました。

私はそこで、私の二十五年間のクラブ顧問生活をふりかえって、「放課後の子どもたちのスポーツ活動を保障し発展させる顧問教師（集団）の役割。」というものを簡単にまとめてみました。十分な準備をせずにかいたものです。また、かき直します。ご一緒に考えましょう。

図表 I 高校生活の楽しみは「おしゃべり」  
——豊かな高校生文化がつかれない——

設問 3. 学校生活の中で充実感をおぼえるのは、次のどれか。

(回答者に対する%)

	全 体		普通高 A		普通高 B		実 業 校		定 時 制 ・ 校	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
学 習 時 間	7.2	4.8	8.2	10.2	8.2	6.6	5.4	3.1	8.1	4.4
ホーム・ルーム の時間と活動	2.6	1.1	2.4	1.8	1.6	1.5	3.5	1.0	3.0	1.8
学校や生徒 会の行事	4.8	5.2	4.9	5.6	4.9	5.0	3.0	6.7	7.9	3.8
クラブ活動	24.0	14.8	33.9	19.3	28.8	20.2	19.6	18.7	16.0	11.8
友人と話し 合っている時	53.9	69.3	44.7	58.9	52.1	63.2	60.4	85.4	55.6	71.6
そ の 他	10.1	3.7	9.2	3.8	11.9	7.0	10.8	5.0	7.6	2.4

1985年にまとめた高教組「非行・学力」問題専門委員会発行の調査 P.30~31, P.72より

すきなスポーツが上手になりたいという要求を大切に育てたい。

次のアンケートをみて下さい。高校生が学校の中で充実感を感じるのには、いわゆる「おしゃべり」だそうですが、次いでクラブ活動が二四％（男子）〜一五％（女子）の数字で回答されています。

この設問の他の項目の中の学習活動、ホームルーム活動、行事にくらべてきわめて高い回答率です。本来、生徒の基礎集団であるべきクラスの連帯感がきわめて希薄なのに比べて、クラブ活動は彼らが主体的に選択しやる気になってやっているとことであることがわかります。別のところの設問で彼らはクラブ活動についてこう答えています。「たのしい。」（二八％）「自分をきたえるため。」（二七％）「友達と努力したり話し合える。」（二七％）「先生や先輩がよくコーチしてくれる。」（二〇％）——同調査七二ページ苦しくてつらい練習も自分をきたえ成長させていくために必要なこと。クラブとはそうした集団だという自覚をうかがわせる回答だと思えます。次の図表は一九八三年に出された新潟市の高校三年生のクラブ加入状況調査をまとめたものです。クラブ活動を三年間、継続したものの四〇％強、底辺校や定時制では三〇％を割るのですが、市内学力ナンバーワンスクールでは五〇％台近くです。クラブ

図表Ⅱ

3. 部活動に参加しましたか。

- (1) 3年間継続して活動した。(イ. 文化部 □. 運動部)
- (2) 途中でやめた。(イ. 文化部 □. 運動部)
- (3) 全く活動しなかった。(イ. 文化部 □. 運動部)
- (4) その他

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	合計
(1)	47	27	55	57	41	33	41	41	50	27	57	52	70	50	19	25	34	40	40	62	44
イ	16	6	31	18	9	12	6	15	9	18	28	18	33	3	10	13	10	13	22	7	15
□	29	21	23	39	30	18	35	24	38	9	29	34	35	40	9	13	24	26	18	55	27
無答	2		1		2	2		2	3				1	7							2
(2)	24	32	18	36	33	51	48	41	49	35	33	34	28	40	35	38	17	36	36	14	34
イ	5	11	12	7	7	5	2	15	6	9	6	4	7	10	10		7	5	14		8
□	17	21	7	26	25	43	43	23	34	26	28	30	15	30	25	38	10	30	16	17	24
無答	2			3	1	2	2	3	9				1					1	6		2
(3)	19	21	21	1	13	18	9	14		26	6	8	4	10	22	38	49	23	6	10	16
イ	2		5		1			11			6		2			13	35			5	4
□		21						1				8		10		13	7			5	3
無答	17		16	1	11	18	9	2		26			1		22	13	7	23	6		9
(4)	9		6	2	11		4	3	1	10	4	7	2		16			3	18	10	6
無答	2	10		3				2	1	3		3	2		1	25					1

活動は大半の高校で半数近くの生徒の放課後の生活の大切な一部なのです。新潟市内の中学校あたりではもっと加入率が高いと思われます。

こうしたこともたちの現実のただ中にいて、「クラブ活動が過熱気味なのは困ったものだ」とだけいっているのは、子どもたちの中にある「スポーツをしたい。」という要求にこたえ、クラブの顧問となって子どもたちの活動の世話をしている教師たち（自らがスポーツの愛好家であることが多いと思うのですが）に「苦勞もしてみないで何をいうか」と一笑されてしまうでしょう。

たしかにクラブ活動は過熱気味です。では各種大会だけの勝敗だけに血道をあげる顧問・生徒たち、競争原理の社会のひずみが色濃く出る「部活」のもう一つの現実はどこに起因するのでしょうか。

勝敗主義（競争原理）の中で孤立している顧問たち

「部活」の活動スタイルがとても閉鎖的なことがあげられます。子どもたちは勿論のこと顧問も自分たちのやり方を経験主義的につみ重ね練習を指導しています。そしてその可否は各種大会の勝敗がどう出たかできまる状況の中にあります。顧問同志にそのスポーツ種目の指導についての研修の機会や研究体制がないからです。顧問ですらそうです

図表Ⅲ

(1) 講習の内容については主にどのようなものがよいか。(人数)

	先生方の理論及び 技術の向上について	各校の生徒の指導 及び実状について	実績校の指導法と 現状について	総 数
上 越	8	5	11	24
中 越	16	14	9	39
下 越	12	13	2	27
佐 渡	3	2	2	7
新 潟	20	15	8	43
総 数	59	49	32	140

## その他、各地区からの意見・要望等

上 越 ①中学校との関連。中学の先生の中に指導者を作り出すには。

中 越 ①競技規則の精通と公認審判員の養成。

②中学校における未経験者の指導に実績のある学校の練習方法を見たい。

③全日本の試合、強化合宿等についてのビデオ等の貸出制度があればよい。

④コート数が少なく時間が限られている等のハンディのある学校で、実績をあげている学校の指導法を教えていただきたい。

下 越 ①バドミントン顧問の交流会を計画し、身をもって経験できる企画が欲しい。

②夏休みに指導者講習会がやれないか。

③講習内容は上記内容全部含めてほしい。

佐 渡 ①多少ラケットを振らせて、シャトルが打てる講習会であるとよい。

②中級者（中学からやってきている生徒に対してのゲーム展開やフットワークやストローク等）の強化のための指導。

新 潟 ①初心者対象コースと経験者対象コースの2つ位に分け、いくつかの分科会を設けて実りのあるものにしてもらいたい。

②公開講座の伝達講習会をお願いしたい。

③指導者同士のサークル活動。

④低レベル校のレベルアップの共同対策。

⑤初心者、中級者ごとくに高体連部八が中心になり講習会を何回か開いてほしい。

⑥合同練習、県外実績校との模範試合などを設けてもらいたい。

から、子どもたちにもそうした体制が保障されていないのは仕方がありません。勝った事が指導が良かったということになれば、一番の近道は弱い者を切りすてるクラブ活動、強い者だけを徹底して訓練する指導が主流をしめます。スポーツは競い合うということ抜きにしてはできないものではあります。今日の社会体制の主流をしめる競争原理が、もろに学校教育に反映し、勝利を獲得した顧問と生徒は授業やホームルームの諸活動での力量などと関係なく学校の名をあげたと賞讃される状況を生み、前記のスポーツ観を一層顧問にも子どもたちにもうえつけていきます。

### どうのりこえていくのかバドミントンにおけるとりくみ

しかし、すべての顧問が、そんな態度でクラブ活動の指導にたずさわっているわけではありません。

私が所属しているバドミントンの分野の状況をお話します。次のアンケートをみて下さい。本年三月、全県のバドミントンクラブ加盟校の八一名の学校からよせられた講習会の内容への希望です。一つ一つは論じませんが八一名の学校の顧問が、互いに交流したい、学びたいという願いが伝わって来ます。これにもとづいて本年三月下旬に講習会をひらきました。結果をまとめたものがありますので全文

紹介します。

—昭和六十年—

高等学校バドミントン指導者講習会

第一日 分散討論会の報告—

はじめに

参加校四〇ヶ校、参加者約五〇名、加盟校の約半数の方々が参加され盛会でした。御支援いただいたバドミントン県協会の方々、準備活動で御苦労された方々、何よりも遠方からかけつけ熱心に受講して下さった方々に感謝いたします。参加して下さった先生方には、三月八日に集約したアンケートにまとめられたような沢山の要求がありました。その一つ一つを出し合い語り合い学び合った会でした。その夜の懇親会、翌日午後の顧問同志のゲーム交流会でも友好を深めました。参加された顧問は、大学でバドミントンを学んで来た人、高校生時代にクラブに参加していた人、教師になつてはじめて子どもたちと一緒にラケットを握った人、年令も五〇才台から新卒数年目の人、顧問歴も三〇余年目、一二年目と実に多様な人々が集まりました。お互にこうした状況を配慮し合つてみんなで子どもたちのためじっくりと語り合い学び合い、交流の輪を広げました。

△第一日目の分科会のまとめ▽

要項のように五分散会にわかれ自由に討論をしました。

まとめてみると大すじ三つの立場があったように思います。

### 一、顧問になったばかりの先生方の気持ち

「ともかく、よその学校（クラブ）でどんな風に行っているか知りたい。」と意欲的です。「日々のメニュー（練習計画）をどうしたらいいか」で困っています。「自分もラケットをふって初歩から憶えていきたい。」という要求も強いようです。入部したての新一年生と共に初心者入門講座などが各地区できまこまかく開催されるといいと思います。教師になるとクラブを一つあずけられ顧問となります。せっかくバドミントン顧問になった方々が企画された研修会活動の中で、生き生きと顧問として育っていくために普及研究活動がもっと力をつけていく必要を痛感しました。その意味で新大の篠田先生の初心者入門指導のためにという第二日の午前の講習会はラケットを自らふって指導技術を理論と共に学んでいくという点で好評でした。

### 二、「へたな生徒も三年まで育てたい」と気をくばっている先生方の気持ち

スポーツを愛する子どもたちを一人でも多く社会に送り出したい。そして卒業後、地域や職場でそして学園でバド

ミントンをやりつづけてほしい。そのことの中に社会体育をになう次の世代を育てていきたい。勿論母校の夏の合宿に多勢応援に来てくれたらこんなにうれしいことはないと思っている。

でもこんな意見もできました。「数十人入ったこともたかを一年合宿時でしぼり、二年、三年にレギュラーの数だけ残すのが最良のチームを強くすることだ。」という反論です。これが勝敗主義のクラブづくりの支配的な考え方だと思えます。これをやめて「勝つ道」をさがすことは新しい創造の道です。それにしても「最近、つらいことをいやがってすぐやめる」という傾向がどこでもつよくなっていること。そのことのために、基礎トレーニングでしごくのではなく、ラケットをすぐもたせ楽しさ、成就感をあげあわせつつ次第に体力をつけることが大切なことをわからせていく。少ないコートを有効にノック方式などを使って全員、シャトルにふれさせていく。へたな上級生も一年生指導に上手に参加させていく。クラブ内の友好を深める様々なレクリエーションや父母との提携をはかる。本当にどの人も苦勞しながらチームづくりをしていることが交流している中でできてとてもよかったです。今度はこうした小さな試みをたくさん引き出した資料集をつくるべきだなと思いました。

三、試合で好成績をあげさせたいとねがっている先生方の気持ち

長い顧問生活の中で豊かな経験を蓄えられ、チームをしばしば上位入賞させた先生方もたくさん参加されました。この方々はさらにチームを強くするために全国のトップのレベルにある青陵高校の練習方法やそれを支える理論、そしてチームづくりを知りたいという願いがつよかったのですが、青陵高校が当日テストにあたっていてその企画が流れ残念でした。次回に期待したいと思います。

この先生方はしっかりと蓄えた経験を支える技術の基礎理論を学びたいという要求の上にもう一つそれにどんなバリエーションをつけた多様な練習方法があるのかを強く求めておられるようでした。高体連バドミントン部の組織の中の強化部が県協会に所属するトップレベルのプレーヤーやかつての名選手の方々のゆたかな経験を協会幹部の方々とまとめ、子どもたちに伝えていく連けいはどうしても必要だということを感じました。また、これらの先生方からは素人の顧問に、今度は一人一人そのつみ上げてこられた多様な練習方法を、じっくりと被露してもらおう企画もいるようです。

討論の中で深くつっこめなかったことで大切なことは次のようなものです。

一、上級生の指導の中にあるシゴキについて  
二、顧問の体罰について

三、受験の選抜体制と学力、体力差の問題

四、各校にちらばった中学時代のすぐれた選手を共に育てていく課題

五、クラブ予算と生徒負担増解決の問題

(一九八六・四・二三 文責・普及研究部 本田)

実技講習についての参加者の感想

—— アンケート集約からの抜粋 ——

△上越地区▽

初参加の方が多く、次回もぜひ続きを、学校にもちかえりすぐ活用したい。チャイニイズテップ(中国式バドミントンのステップフットワークの練習)はきつかった。今後、筋力を科学的に付ける方法を学びたい。

△中越地区▽

回内・回外・リストスタンド等を学びこれまでのフォーム指導を完全にかえねばならぬということはショックだった。練習のバリエーション等、参考になることをたくさん覚えた。

△下越地区▽

もっと時間をかけて練習過程を勉強したかった。ダブルゲームのフォーメーションづくりとゲーム展開のアドバ

イスをして欲しかった。

### △新潟地区▽

実技指導を二日間やって欲しい。理論にうらづけられた講習により自信がついた。

詳細はのべられませんでした。こうして自分の指導を客観視できる討論交流会、科学的な理論に支えられたトレーニングと実技の学習の機会をもつことによって顧問たちは、根性としごきで「部活」の活動を高めていくのではなく、民主的に話し合い、ゆたかな指導技術を学びとることではない。ねいな指導をする。子どもたちに何故このようにクラブ活動を大切にしてみんなが高め合うのかを語り、科学的に運動を理解し訓練をつづける、そうした土台がきずかれはじめました。

そうした試みが、県内各地域の高校クラブで、一部分からでもよいからはじまっていくことを長い展望の中で、みんな夢としてもとうとうという人々が普及研究部に集まっています。七月二〇日には、合宿の練習方法をどう組み立てるかで市内高校を中心に生徒約八〇人、顧問二〇人があつまりました。去る六月、筑波大学でのバドミントン指導者講習会で学習したことを生徒たちを入れての復習する会です。

二十ヶ校近くの男女生徒たちが、息をはずませて実技を学び話をきく姿はとて素敵でした。少し補足をしますと、

こうしたうごきをつくり出すには約二〇年の歳月がかかっています。出発は私の顧問になったときの悩みをどう解決するのかということからでした。

二八才で吉田商業高校のバドミントン顧問にさせられたのです。苦節一〇年で全県優勝をはたしたとき、素人顧問が一人でがんばるのではなく、みんなの力を借りてがんばる時、いろんなことができるのを知りました。私の力というよりまわりの人たちの力で出来たのです。

少し荒っぽく語ると①たくさんの顧問と友達になることが第一でした。大会に生徒を引率しゲームへの批評をもとめられても、何もいえぬ体育館の壁の花のような自信のない顔をしていた私は、ステージの上にあがって自分の出来ること進行の役をたくさん引き上げました。そこで、先輩の人と知り合いになり、いろんな話ができました。私の学校が当番の時は、コーヒーにお菓子、ポケットマネーをはたいてせい一杯接待をし、先輩の先生方のゲーム批評に耳をかたむけました。以後、役員になっては全顧問がステージに上って交代して進行を引き上げ、時間が空いたときはステージを社交の場とするように努めています。生徒たちも壁の花の先生よりも選手をコールし、大会を進行させている先生の方に信頼感をもつのではないかと思えます。そこで得た耳学問、そこで知り合ったすぐれた指導者とのその後の交流は、子どもたちがバドミントンを私以外のすぐれ

た顧問、チームに触発されるためにも必要なことだと思ひました。

②コーチ能力は若い内に身につけた方がよい。どうせ顧問になるなら逃げないでバドミントンのプロコーチをめざそう。

少し気負った気持ですが、子育て真最中なのに女房には苦労かけっぱなしでバドミントンをやりました。我が家が合宿所になったり、家族サービスカねての弥彦合宿をくんだりしました。子どもたちと妻が私の活動を知るといふ点、生徒たちと家族ぐるみ卒業後もつき合う点ではよかったです。

地域に佐藤さんという四〇才ぐらいのバドミントンのすぐれた愛好家がいらっしやいました。その人について手に豆をつくってやりました。当時、バレーの大松監督が「おれについてこい。」という本の中で技術を分習して選手を訓練していることを知り、それがバドミントンでも当時の青陵高校でおこなわれているのを知りました。(その時の顧問の阿部先生が現在、私たちが筑波大の公開講座で学ぶ大学の先生になっています。)部分を学び全体につなげることであったら私もやれる。こうして一つ一つの技術を身につけました。一人ではわからないことが多いので、西蒲の顧問の方々と阿部先生から何回も来ていただいて、今、高体連、普及研究部でやっているようなことを合同研修会としてもちま

した。阿部先生が青陵高をやめて上京し、すぐれた科学的な指導者の道を歩まれていく時もつきまとして、仲間と共にコーチ技術を、その土台の科学的理論を学びました。今から考えると私の理解は大分あやしいものなのですが、でも「根性」「根性」というより、どうしたらその技術が身につくかが私自身の課題でしたから。もっともらしく子どもたちに説明し、合宿ノートなどにはどうマスターしたかを克明にかきとらせました。このことは次の教訓につながります。

③卒業生はクラブ発展の宝。社会体育の担い手だ。——合宿やクラブびらきは交流の場——

合宿にたくさんの卒業生が来しました。(東工業ではやっとその端緒がはじまったところですが)カンパ十万円。さし入れ無数。代々そうしていると子どもたちはゆたかな財政で合宿ができます。合宿にはA、B、C、D級(男女一緒に)に分けました。先輩たちをその力量に応じてコートに入ってもらいます。彼らのもっとも得意とするところをやってもらいます。在学中に憶えた「リストスタンド」「スタンス」「ウィップング(ラギングバック)」「回内・回外」等々の用語が後輩に技術を指導していく時の共通語となります。来た先輩には一言、語ってもらいます。在学中のつらい練習、たのしかった肝だめし、就職した職場で社会で学んだこと等々です。私の説教より効果があります。

私と同じような経験を顧問歴の長い方は、たくさん抱えていることがわかって来ました。そうした中で蓄積されたものを若い顧問に整理して伝えたい。若い顧問の方でこれからどうしていくかということを探している人がより合っ

なる抽せん会だけの仕事から脱却することを考えはじめたのです。はじまってまだ数年目ですが、子どもたちのために、みんなですてやれることをみんなで力を合せてつくっていくうごきをはじめました。みなさんの所属する種目で、高体連バドミントン専門部の活動をより組織的に、単

（県立新潟東工業高等学校）

特製版  
真下信一著作集（全六巻）

一九八五年二月九日、真下信一先生は亡くなりました。平和と民主主義の運動においても、学問の分野においても、先生はその生涯を通じて大きな業績を遺されました。

先生を失った今、先生の学問的業績とヒューマニズの精神をしっかり受けとめ、学びたいという要望が、以前にもまして強く出されています。しかしながら、一九七七年に刊行されて以来多くの人々に愛読されてきた先生の著作集は、現在、学版元にも在庫がなく入手困難となっています。

そこで、先生の著作集の五巻に名古屋哲学セミナーでの講義を録音したテープを別巻として付け加えて再版することにしました。絶妙な先生の語りかけは、著作集をより身近なものとして御活用いただけるものと思います。

今日、学問の良心の出版は困難をきわめています。先生の豊かな思想を共有するため、自由と平和を願う多くの方々と共にこの著作集普及の事業を成功させたいと思います。

○定 価 一 二、〇〇〇円（全6巻セット、分売不可）

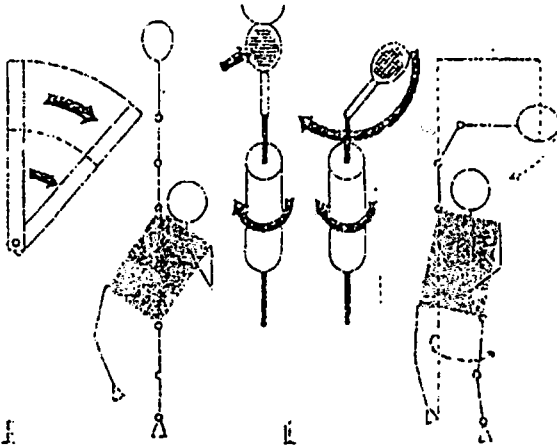
特装版真下信一著作集普及委員会

新 日 本 書 館  
事務所 新潟市牡丹山4-8-3  
永井ビル2F  
TEL (025) 274-8665

——バドミントンのストロークを改善するために——

より高くひじをのばしてうて  
 ということの—面的なあやまりをなおす理論の一部紹介

A

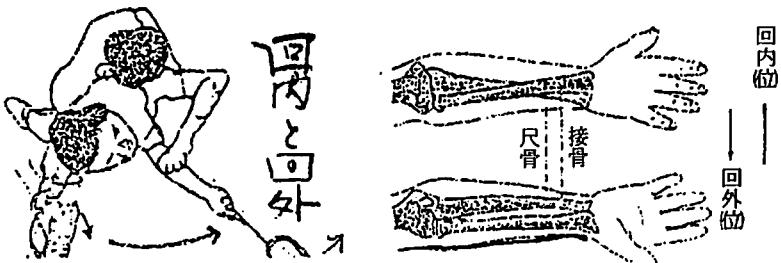


○てこ型を用いたストロークの理想モデルIと。(今までのストローク)

○長軸回転を用いたストロークの理想モデルは図54のうらう対比される。

したがって、実際のストロークモデルは、理想Iと理想IIの拮抗し合う中で決まる。それぞれの割合の違いからいろいろなフォームや発達の段階が決まることになるだろう。

B



上肢についてみれば、前腕には回内・回外という長軸回転運動、外旋・内旋という長軸回転運動が観察される。

～オシロクラフがよみとるストロークのうごき～

C・たて形に出る初心者の位相

・たてと横に出る上級者の位相

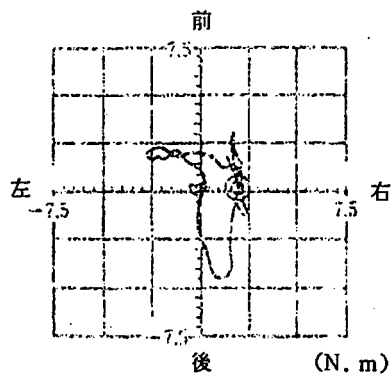


図 51 初心者の位相図

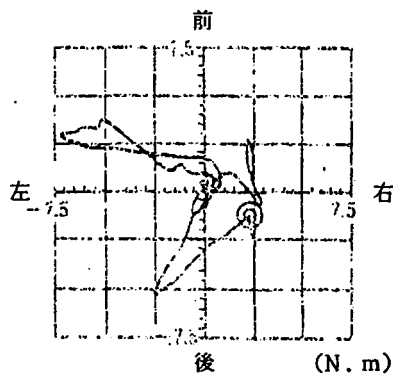
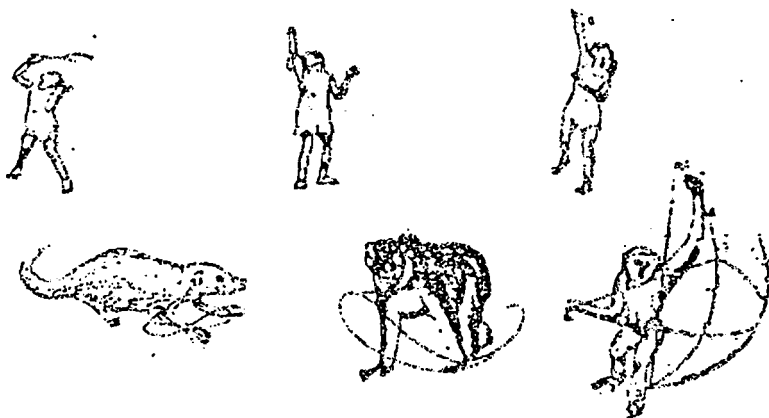


図 52 上級者の力の位相図

相違点は、図50を用いてなされる。上級者の運動には、単にたて型の運動が含まれているだけでなく、長軸回転と呼ばれる車輪・車軸型の運動め含まれている。

D「個体発生は系統発生をくりかえす」

☆動物の腕のうごきも発達の中で、前腕から上腕運動に発展している。



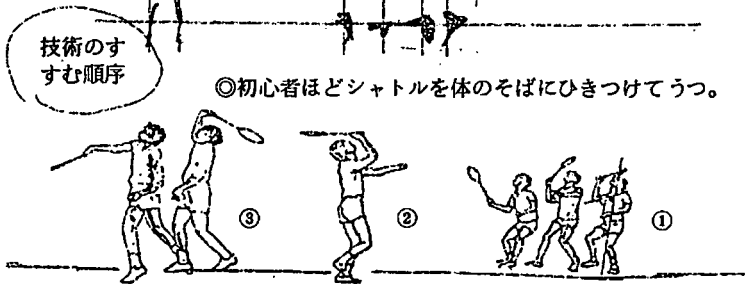
E バドミントンの発達



バドミントンの発達もラケットとシャトルの発達もあって、ハネつき形から回内・回外運動を入れてうつように発展している。

F 技術の進む順序

◎初心者ほどシャトルを近くにひきよせヒジをまげ、ラケットの面を正面にむけてうつが、次第に回内・回外運動を入れてうつている。



◎初心者ほどシャトルを体のそばにひきつけてうつ。



ラケット面をネット正面にむけてうつが次第に回内回外運動が入ってくる。



※以上の資料の中の図表は、現代スポーツコーチ実践講座12 バドミントン、大石三四郎・浅田隆夫編、阿部一佳・岡本 進著の中のものを用らせてもらっています。